教室内外での出来事による学習者の「学習意欲」の変動とその背景となる心理的要因

―「可能性の予期」に注目して―

西部由佳

要旨

本調査では、教室内外における学習者の「学習意欲」の変動の実態を知り、その背景にある心理的要因を明らかにするため、日本語学校・大学別科に所属する日本語学習者 176 名を対象に質問紙調査を行った。

まず、学習者がよく出会う出来事を特定し、それに出会った時の「学習意欲」の変動を調べた。その結果、自分の「努力不足」に帰属できる出来事では「学習意欲」は上がるが、自分の力で状況が変えられない出来事では下がってしまうこと、また、「学習意欲」にマイナスに働くような出来事でも、「可能性の予期」「内発的動機付け」を多く持っていれば「学習意欲」が上がり、「第二言語不安」については、「学習意欲」と必ずしも負の関係にはないことがわかった。

更に、心理的３要因の中で特に「可能性の予期」と「学習意欲」の関わりの強さが示唆されたため、「可能性の予期」に焦点をあて分析を続け、「可能性の予期」を維持するための留意点について考察を行った。

キーワード：学習意欲　可能性の予期　内発的動機付け　第二言語不安　中級学習者

１．はじめに

第二言語習得の分野において、Dornyei (2001)は動機（motivation）を方向（direction）と規模（magnitude）に分け説明している。方向とは「なぜそれをするのか」といった人間の行動の方向に関するものであり、規模とは「どのくらい一生懸命やるか」といった心的エネルギーの量を問うものである。いままでの日本語教育の動機付け研究を振り返ってみると、これらのうち「なぜ日本語を勉強するのか」といった方向に注目したものが多かった（縫部・狩野・伊藤 1995　成田 1998　郭・大北 2001）。また、動機の規模に注目した研究としては、実際の教室活動と学習への動機付けの高まりを扱った倉八（1993、1994）や三矢（2000）

があるが、学習者の学習環境との関わりの中で変動する動機づけの強さに焦点を当てた研究を筆者は承知していない。

鹿毛（2004）は、「動機付けは個人内に閉じたシステムではない。外界との相互作用によって常に機能するものであり、その意味でダイナミックな心理現象である」としている。わざわざ日本に来て勉強しようという学習者は、それなりの目標と覚悟を持って日本に来ているが、そんな学習者でさえ、日々の生活の中で出会う出来事に影響を受け、いつも「学習意欲」を高く保つことは難しいようである。学習者が出会う様々な困難な状況は、学習者自身の努力で何とかなるものもあれば、どうにもならないものも確かに存在する。そのような状況を学習者自身が乗り越えていくためには、学習者に何が必要で、また教師に何が出来るのであろうか。そこで、本研究では、教室内外で様々な出来事に出会うことによる日本語学習者の「学習意欲」の変動の実態を知り、その背後にどのような心理的要因が影響しているのか調査することを目的とした。

Ushioda(2001)は「『他者をいかに動機付けることが出来るか』ではなく、『他者が自身を動機付ける状況をいかに作り出すことが出来るか』が教師の課題である」としている。最終的には、学習者の「学習意欲」の維持のために教師が留意すべき点について提案していきたい。

２．先行研究

石井（1995）は「日本語学習者の学習意欲とは何か」について客観的に分析を試み、これを、動機付け研究の枠組みで捉え直して、「内発的動機付け」「自己効力感（可能性の予期）」「達成動機付け」の 3 要因を得た。「自己効力感」について石井は、「自己効力感とはある行動の結果の予測とその行動をどの程度うまくできるかという確信のことである」と説明している。また、バンデュラ(1979)では、「人は将来の出来事を予想する能力を持っているから、結果を予想することによって動機づけられる」と動機付けとの関係を示唆している。

また、福島（1997）は「自己効力感」を「可能性の予期」と呼び、「動機付け」と「可能性の予期」の高低の組み合わせで、どのように「不安」が起こるのかのモデルを示した。さらに、元田（2005）は「第二言語不安」研究の中で、「動機付け」を「動機付けの強さ」と「動機付けの内容（内発的動機付け）」に分け、福島（1997）のモデルを再度検証した。その結果、「第二言語不安」は、「可能性の予期」「動機付けの強さ」「内発的動機付け」全てが高いと低く、「内発的動機付け」だけが低いと「第

二言語不安」を最も強く感じるという結果を得ている。

以上は、「動機付け」と他の「心理的要因」との関係を調査した先行研究であるが、本研究では元田（2005）を参考に、心理的要因として「可能性の予期」「内発的動機付け」「第二言語不安」を取上げ、「学習意欲[1)]」の変動との関わりを見た。

３．調査の概要

3.1 調査の目的・リサーチクエスチョン

本調査の目的は、教室内外で様々な出来事に出会うことによる学習者の「学習意欲」の変動の実態を知り、その背後にどのような心理的要因が関わっているのかを探ることである。そのため、①どのような学習者が、教室内外でどんな出来事によく出会うのか、②その時、学習者の「学習意欲」はどう変動しているか、③同じ出来事が起こっても「学習意欲」が上がる人と下がる人に分かれる要因は何か、という３つのリサーチクエスチョンについて調査を行った。

3.2 調査方法

3.2.1 調査期間・調査対象者

本調査は、2007 年 6 月から 7 月にかけて、都内日本語学校で学ぶ就学生 114 名、大学別科で学ぶ留学生 62 名、計 176 名を対象に実施した。性別は男子 56 名、女子 116 名（無記入 4 名）。国籍は、韓国 88 名、中国 38 名、台湾 24 名、タイ 9 名、アメリカ 4 名、香港 3 名、その他 10 名であった。また、年令は、18 歳以下 5 名、19～23 歳 78 名、24～29 歳 72 名、30～35 歳 7 名（無記入 14 名）だった。

3.2.2 質問紙

質問紙の内容は、「学習意欲」の変動に関するものと、学習者の心理的要因に関するものとの 2 種類で構成されている。

「学習意欲」の変動に関する項目については、2005 年、2006 年に都内日本語学校においてパイロット調査として行った質問紙調査及びインタビュー結果をもとに、「学習意欲の変動に影響を与える教室内外での出来事」に関る 17 項目を作成した。質問紙への回答方法としては、まず、学習者に、ここ 3 ヶ月で質問紙の 17 項目のような出来事を経験したかどうかを尋ねた。ここで「経験した」と答えた学習者のみ、次の段階として、このような出来事に出会った時、「学習意欲」がどうなっ

たか（上がった・変わらなかった・下がった）を選択してもらった。

また、学習者の心理的要因として、元田（2005）を参考に、「内発的動機付け」「可能性の予期」「第二言語不安」を取り上げ、質問項目を作成し、学習者がこれらの要因をどのくらい感じているのかを答えてもらった。各要因の質問項目の信頼性については、信頼性の検討を行い、それぞれ、クロンバックα係数を算出した。その結果、「内発的動機付け」「可能性の予期」「第二言語不安」それぞれ、α＝.80, .95, .89 であったため、信頼性はあるものと判断した。なお、質問紙は韓国語、中国語、英語、タイ語の翻訳版を作成した。

これらの質問紙を、授業の最後に配り 10～15 分程度で答えてもらった。一部、時間が取れなかったクラスでは、持ち帰り、後日回収という形をとった。質問紙の分析後、フォローアップインタビューとして、上級日本語学習者 3 名に半構造化インタビューを行った。

４．結果と考察

4.1 リサーチクエスチョン①

「どのような学習者が、教室内外でどんな出来事によく出会うのか」

リサーチクエスチョンに答えるため、まず、調査対象者を使用教科書をもとに初級・中級・上級のレベルに分け、それぞれのレベルごとに、質問紙で取り上げた「学習意欲」の変動に関わる 17 の出来事について、「経験あり」と答えている人の割合を計算した（表１）。特に、隣接レベルとの差が 20%以上の項目を中心に考察を行う。

結果によると、項目⑧では、初級に対し中級の割合が 21%高くなっている。これについては、様々な理由が考えられるが、中級学習者が初級での基礎文法を終え、日常生活に困らなくなった反面、初級の時のように昨日話せなかったことが今日話せるようになるといった、自分の日本語の伸びを感じるような体験が減ってきたことに一因があるかもしれない。⑪に関しては、中級と上級では 41%とかなりの差がある。これは、上級では、教科書以外にも様々な生教材を取り入れることが多く、必ずしも学習者の興味・目的にあっていないということが理由かもしれない。学習者の多様化（林 2006）に加え、ここ数年、学習者の学習目的・興味も更に多様化している。ある程度日本語が自由に使える上級学習者全てに満足のいく授業をするのは、なかなか難しいと言える。⑩に関しては、初級から中級で 27%も高くなっている。これは、学習者の生活範囲が、今まで自分の部屋と学校中心であったものから、アルバイトを始め

るなど、少しずつ広がっていった結果ではないだろうか。また、20%には達していないが、⑦の初級から中級の増加に関しても、学習者の生活範囲の広がりと共に、日本語能力の向上に伴う情報量の増加が関係していると考えられる。⑰については、中級レベルと上級レベルとの会話の質の違いが関係しているかもしれない。中級での日常会話レベルから、上級に入り、もう少し高いレベルの会話を目指した結果、挫折を味わった経験とも考えられる。また、会話能力が、必ずしも教科書レベルと一致していないことも一因ではないだろうか。最後に⑯に関しては、20%には達していないが、初級から中級、中級から上級で割合の増減が見られる。これについても様々な理由が考えられるが、中級あたりでは日常会話から抜け出し、ある程度日本人と自由に話せるようになり、日本人との会話も親密度を増すが、上級レベルになり更に日本人と親しくなりたいという思いとは裏腹に、親しくなることの難しさを感じていることも一因として考えられる。調査後インタビューで、ある学生が「周りの日本人を見ていると、私の国と日本では友だちの付き合い方が違うんだなと感じる」と話していた。

表１　教室内外で出会う出来事　（教科書レベル別）

＊は隣接するレベルでの割合が 20%を超えているもの

「学習意欲」の変動に影響を与える 教室内外での出来事	初級 ／52 名	中級 ／73 名	上級 ／51 名
①日本の生活になかなか慣れないと感じる	29%	33%	33%
②日本人との会話がうまくならないと感じる	58	77	76
③クラスメートが自分より出来ると感じる	75	79	88
④忙しく、疲れて時間がうまく使えないと感じる	65	64	80
⑤日常、周りで聞く日本語がわからないと感じる	77	67	63
⑥後輩が入ってきて刺激を受けた	19	27	31
⑦外国人の犯罪のニュースを見て留学生の立場が悪くなるのではと思った	19	37	41
⑧自分の日本語が上手になっているか分からない	＊65	＊86	80
⑨授業が難しくなり、分からないことが増えた	67	66	51
⑩外国人だから日本人と違った扱いをされた	＊37	＊64	67
⑪授業の内容が自分のやりたい事と違う	37	＊30	＊71
⑫テストで思った結果が出なかった	67	71	65
⑬日本人の知り合い・友達ができない	60	69	68

⑭ほかの国の人たちが自分たちよりよく出来る	46	43	37
⑮とてもうまく日本語を話す留学生に会い、うらやましかった	83	66	71
⑯友達だと思っていた日本人が自分を外国人としか見てくれていないと感じる	40	21	37
⑰日本人に自分の日本語が分かってもらえなかった	58	＊49	＊75

4.2　リサーチクエスチョン２

「その時、学習者の『学習意欲』はどう変動しているか」

表 2.表 3 に、質問紙で取り上げた 17 の出来事について、この 3 ヶ月のうちにそれらを経験した学習者の「学習意欲」がどのように変動したかを載せた。表２は「学習意欲」の上がった人の割合が高かった項目（６５％以上）である。項目を見てみると、①⑤⑨⑫⑰のように、自分の日本語能力不足を実感させられる出来事であったり、②⑮のように他人との比較により客観的に自分の日本語の力のなさを感じたり、⑧のような自分の日本語能力に対する不安であったりと、全て、自分の「日本語能力」に関する項目であった。また、表３は「学習意欲」が下がった人の割合が高かった項目（20％以上）である。⑫の「日本語能力」に関する項目以外は①④「日本での生活」、⑪「シラバス・カリキュラム」に関する項目、⑩⑬⑯「異文化摩擦」に関する項目だった。

Weiner(1992)は、学習に関る失敗・成功の主な要因に「能力」「課題の難しさ」「努力」「幸運」をあげ、自分の失敗を「努力不足」に帰属させられれば「努力すれば出来る」という前向きな発想につなげやすいとしている。今回の結果も、上がった項目については、学生がそれらの項目のように感じた原因を「努力不足」「怠けてしまったから」という反省に帰属させ、「がんばればできる」という前向きな気持ちにつなげていった結果ではないだろうか。逆に、下がった項目の①④は「どんなにがんばっても今の生活には慣れないし、忙しい生活はかわらない」、⑪は「自分で授業の内容を選択することは出来ない」、⑩⑬⑯は「何とかしたいのだが、他人がすることだから自分ではどうしようもない」と、なかなか前向きな発想にはつながらない内容といえる。実際、調査後インタビューでのある学生の「テストの成績がいい時は、見直しもしないが、悪いと『もっとやらなくては』と思うし、日本人と話してうまく伝わらない時は、かえって意欲が上がる」という話からもわかるように、「力不足」を実感することがかえって、刺激になっているようである。

表２　「学習意欲」の上がった人の割合が高かった項目（65%以上）

		割合
①	日本人との会話がうまくならないと感じる	72.0%
②	クラスメートが自分よりよく出来ると感じる	77.5
⑤	日常、周りで聞く日本語が分からないと感じる	67.8
⑧	自分の日本語が上手になっているのかどうか分からないと感じる	68.8
⑨	授業が難しくなり分からないことが増えた	69.7
⑫	テストで思った結果が出なかった	68.3
⑮	とてもうまく日本語を話す留学生に会い、うらやましかった	91.3
⑰	日本人の友だちに自分の日本語がわかってもらえなかった	68.3

表３　「学習意欲」の下がった人の割合が高かった項目（20%以上）

①	日本の生活になかなか慣れないと感じる	44.6%
④	忙しく疲れて時間がうまく使えないと感じる	26.2
⑩	外国人だから日本人と違った扱いをされたと感じる	23.0
⑪	授業の内容が自分のやりたいことと違う	46.8
⑫	テストで思った結果が出ないことがあった	24.2
⑬	日本人の友だちや知り合いがなかなかできない	25.9
⑯	友達だと思っていた日本人が、自分のことを外国人としか見てくれていないと感じる	32.7

4.3 リサーチクエスチョン③

「同じ出来事が起こっても『学習意欲』が上がる人と下がる人に分かれる要因は何か」

質問紙で取上げた「学習意欲」に関する 17 項目について、「学習意欲」が上がった人と下がった人の間で、心理的要因の「可能性の予期」「内発的動機付け」「第二言語不安」の感じ方に違いがあるかの検討（T 検定）を行った。その結果、17 項目中、表 4 で示す 9 項目で「有意差／有意傾向あり」という結果が出た。

そこで、この 9 項目について心理的要因についてどのような差が出ているのかを見てみると、「可能性の予期」「内発的動機付け」では「学習意欲」の上がった人のほうが下がった人より高かった。つまり、比較的マイナスの出来事に出会っても、自分の日本語に将来の可能性を感じ、内発的動機付けを多く持っている学習者ほど、「学習意欲」を高く保つことができることになる。また、「第二言語不安」については⑮で有意差ありとなっており、「学習意欲」が上がった人のほうが「不安」が高くなっていた。「第二言語不安」と「学習意欲」の間には負の関係が一般的には考えられるが、必ずしも「第二言語不安」があることが「学習意欲」の低下にはつながらないことが示唆された。

また、9 項目中、「可能性の予期」について 6 項目で関わりが見られ、他の要因より多かった。これらの事を考えると、「可能性の予期」と「学習意欲」の変動との関わりが強いのではないかということが見えてきた。

表 4　3 要因と「学習意欲」の上がった人・下がった人についてのＴ検定

注）*p<.05, +p<.1

出来事	要因	結果
①日本の生活になかなか慣れないと感じる	可能性の予期	t=1.89+(df =47)
②日本人との会話がうまくならないと感じる	可能性の予期	t=1.63+(df=103)
⑥後輩が入ってきて、刺激を受けた	可能性の予期	t=2.15*(df=29)
⑩外国人だから、日本人と違った扱いをされた	可能性の予期	t=2.89* (df=81)
⑪授業の内容が、自分のやりたいことと違う	内発的動機付け	t=1.65+ (df=50)
⑫テストで思った結果が出ない事があった	可能性の予期	t=1.72+（df=107)
⑬日本人の知り合いや友達がなかなか出来ない	内発的動機付け	t=1.80+ (df=89)
⑮とてもうまく日本語を話す留学生に会い、うらやましかった	第二言語不安	t=2.04*(df=117)
⑯友達だと思っていた日本人が、実は、自分のことを外国人としか見てくれていないと感じる	可能性の予期	t=2.48* (df=33)
	第二言語不安	t=2.24* (df=32)
	内発的動機付け	t=1.88+ (df=34)

５．学習者の「可能性の予期」を高めるために

表４のＴ検定の結果より、心理的 3 要因の中で特に「可能性の予期」と「学習意欲」との関わりが示唆された。そのことより、学習者がより多くの「可能性の予期」を感じれば「学習意欲」を高められる可能性があると考えられる。そこで、「可能性の予期」に焦点をあて、そのための教師の留意点について考えていきたい。

5.1 可能性の予期と内発的動機付け

「可能性の予期」の維持のためにはどうすればいいかについての示唆を得るため、「可能性の予期」と他の心理的２要因との相関をピアソンの積率相関係数で求めた。結果は、「第二言語不安」との間に有意な相関は見られなかったが、「内発的動機付け」との間に r=.21(p<.01) で有意な正の相関がみられた。つまり、「可能性の予期」の維持のために「内発的動機づけ」も何らかの関わりがあると考えられる。

デシ（1985）は、内発的動機付けを高めるためは「やればできる」という「有能感」と「やることは自分で決めている」という「自己決定感」が大切であると言っている。つまり、できたという達成感をどれだけ感じているか、また、どれだけ責任を持って自分の行動に関わっているかが大切であるということになる。「有能感」「自己決定感」を感じさせる具体的教室活動として、倉八（1993）がプロジェクトワーク[2)]を提案している。倉八はプロジェクトワークの教室活動についての留意点として、①何か１つ形に残るものを仕上げ、学習者に自信と達成感を与えること、②学習者自身が自分の専門に関連したテーマを選び、自己関与を高めることを指摘している。

5.2 初級学習者と中級学習者

リサーチクエスチョン１の結果より、「学習意欲」に関わる出来事の17 項目中、⑧「自分の日本語が上手になっているかどうか分からない」で、初級学習者から中級学習者にかけて「そのように感じた経験あり」と答えた割合が増えていた。では、「可能性の予期」については、初級、中級、上級学習者の間で感じ方に差があるのだろうか。そこで、教科書レベルを独立変数、「可能性の予期」を従属変数とした 1 元配置の分散分析を試みた。その結果、$F(1,170)=3.05$ ($p<.005$)となり、5%水準で有意であった。更に、Tukey 法[3)]を用いた多重比較の結果、「初級」と「中級」の間に 5%水準で有意差があり、中級学習者のほうが初級学習者より「可能性の予期」を感じているという結果が出た。また、中級と上級では「可能性の予期」の感じ方に有意差は出ていないが、平均値は上級学習者のほうが中級学習者より低いという結果になっている。初級では基礎文法を身に付けることによって日常会話ができるようになり、生活には困らなくなった。そこで、中級になると、日本人とより深い内容の話ができるようになることを求めるようになる。さらに、生活面ではアルバイト等で行動範囲が広がり、日本語使用の機会が増えていくだろうという予感から、自分の日本語への可能性が膨らんでいく時期といえる。しかし、インタビューによると、実際には、アルバイトでは決まった日本語を使うだけで、日本人との関係が深まっていくわけではないため、使用する日本語が日常会話の域をなかなか出ないようである。パイロット調査後インタビューで、「日本人の友だちと付き合っている時、色々話して会話がどんどんうまくなっている気がしたが、付き合いがなくなると自分の会話の力がわからなくなって、全然自信がなくなった。」と

ある学習者が言っているように、実際に学習者にとって日本人と話すことは、自分の日本語能力を知るバロメーターになっているようだ。しかし、生活の中では、期待しているほど日本語使用が深まっていかないことが、自分の日本語に対する「可能性の予期」を維持しにくい原因になっているのかもしれない。

これらのことを考えると、日本語への上達への不安と生活に対する不満を抱えている中級学習者への教師の配慮が必要になってくると言えるのではないか。

６．まとめと今後の課題

本調査において、日本語学習者は日常の様々な出来事によって「学習意欲」を変動させており、原因を自分で改善していけることに帰属できれば「学習意欲」は上がるが、自分では状況を変えることが出来ないと感じられるような出来事では下がる傾向にあることが分かった。しかし、そのような出来事に出会っても、「可能性の予期」「内発的動機付け」が高い人の方が「学習意欲」が上がる傾向にあること、「第二言語不安」が必ずしも「学習意欲」と負の関係にはないことが分かった。また、心理的３要因の中で、特に「学習意欲」と「可能性の予期」の強い関係が示唆され、学習者の「学習意欲」を維持するためには、学習者自身が「日本語能力」の将来に可能性を感じることが大切であることがわかった。

次に、「可能性の予期」と「内発的動機付け」の関係を調べると、正の相関が見られた。このことから、学習者自身が達成感を感じることができ、自己決定できる機会のある活動を行うことが「内発的動機付け」を高め、「可能性の予期」の維持に繋がるのではないかと考えられる。

また、中級というのは自分の日本語への可能性は強く感じているのだが、今の自分の能力への自信が持てない時期のようである。心理的にも、生活面においても不安を抱えている中級学習者への教師の配慮が大切であると考えられる。

最後に、本研究は学習者の外界との相互作用の中で変動する「学習意欲」に焦点をあて、心理的要因との関係を量的に検討したという点で、日本語教育の「動機付け研究」に新しい視点を加えたものであると確信する。しかし、調査後インタビューを通して、学習者の「学習意欲」には本研究で取り上げた心理的要因以外にも、個別性などさまざまな要因が複雑に絡み合っていることも見えてきた。今後は、学習者ひとりひとりの「学習意欲」の変動をより丁寧に描写する質的調査も必要であると

考える。

また、「可能性の予期」を維持するためにどのような具体的教室活動を行っていけばよいのかについても、今後、検討・検証をしていきたい。

謝辞

筆者の指導教官である西原鈴子先生（東京女子大学）をはじめ、アンケートにご協力くださいましたイーストウェスト日本語学校、桜美林大学留学生別科、文教大学留学生別科の皆様に厚くお礼を申し上げます。

注

１）福島（1997）は「行動への傾斜を外から客観的に捉える時は『動機付け』、それを本人の主観から見る場合は『意欲』を用いる」と定義している。本研究においては、学習者自身がアンケートを通して自分の行動を内から主観的に捉えていると考え「学習意欲」という言葉を用いる。

２）倉八(1993)は、学習者が自分の専門分野からトピックの選択を行い、日本人へのインタビュー、報告書の作成、発表といった流れのプロジェクトワークを行い、学習者の「学習意欲」の向上を報告している。

3)分散分析で「可能性の予期」の有意差を説明した後、初級・中級・上級のどの群間に有意差があるかを確かめるため Tukey 法を用いた。

参考文献

石井秀幸（1995）「日本語学習者の学習意欲を構成する因子の分析」『平成 7 年日本語教育学会春季大会予稿集』pp.１－６.

郭俊海・大北葉子（2001）「シンガポール華人大学生の日本語学習の動機づけについて」『日本語教育』110 号　pp.130-139.

倉八順子（1993）「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識・態度に及ぼす効果（１）―一般化のための探索的調査―」『日本語教育』80 号　pp.49－61.

倉八順子（1994）「プロジェクトワークが学習成果に及ぼす効果と学習者の適正との関連」『日本語教育』83 号　pp.136-47.

鹿毛雅治（2004）「動機付け研究」へのいざない　『動機付け研究の最前線』上淵（編）京都：北大路書房 pp.1―28.

デシ,E.L.(安藤延男・石田梅男　訳)(1985)『内発的動機づけ－実験社会学的アプローチ－』　誠信書房

成田高宏（1998）「日本語学習者動機と成績との関係―タイの大学生の

場合―」『世界の日本語教育』8, pp. 1 －11.
縫部義憲・狩野不二夫・伊藤克浩（1995）「大学生の日本語学習動に関する国際調査―ニュージーランドの場合―」『日本語教育』86 号 pp.162-172.
バンデュラ,A（原野広太郎　監訳）(1979)
『社会的学習理論　人間理解と教育の基礎』　　金子書房
林さと子（200６）「日本語学習の多様性と個別性-第二言語習得研究の視点から」pp.4-19.　『第二言語の個別性要因に関する基礎的研究-社会文化的要因を中心として-』平成 14~平成 16 年度　科学研究費補助金基礎研究　研究成果報告書　凡人社
福島脩美(1997)「学習意欲の問題」日本行動科学学会（編）『基礎と臨床の心理学シリーズ５　動機付けの基礎と実際』川島書店　pp.273-285.
三矢真由美（2000）「能動的な教室活動は学習動機を高めるか」
『日本語教育』103 号、pp. 1 -10.
元田静（2005）『第二言語不安の理論と実態』pp.125-147.　渓水社
守谷智美（2002）「第二言語教育における動機づけの研究動向―第二言語としての日本語の動機づけ研究を焦点として―」『言語文化と日本語教育』5 月号、pp.315-329.
八島智子（2004）『外国語コミュニケーションの情意と動機―研究と教育の視点―』関西大学出版部
Brown, H.D. (1980) *Principle of language learning and teaching* Englewood Cliffs, Nj: Prentice-hall
Dornyei, W. (2001) *Teaching and researching motivation*　Pearson Education Harlow England
Gardner, R. C., (1985) *Social Psychology and Second Language Learning: The role of attitude and motivation* London: Edward Arnold
Horwitz, E.K., Horwitz, M.B & Cope, J (1986) “Foreign language classroom anxiety” *Modern Language Journal*　170 125-132
Ushioda, E. (2001) “Language learning at university: Exploring the role of motivational thinking” In Z. Donyei, & R.W. Schmidt (Eds.) *Motivation and second language acquisition.* Honolulu, HI: University of Hawaii Press, 93-125
Weiner, B. (1992) *Human Motivation: Metaphors, theories and research*. Newbury House, CA: Sage

(East-West Japanese Language Institute)